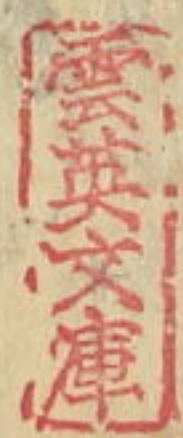


摩訶十五夜

黑露



あつし乃素堂三十三回三出八月十五
と女の目下子懐旧の微意は手向まじ



十四夜

黒主病

はなれぬやうに似たり目の影

こゝろ櫻の葉乃平座のそとく

馬光

西山しをみおの隣りけしむる

彦和

福も絆のぬりりり梨

彦

多川今掃くはと足跡りけ

光

茶湯よりれハ振ッ高色

和

六月乃平座り物と貝より茶

彦

清きくくく流の源流と
 直にせしむる流しきる舟筏
 舞とよふ名とこそ一とふ
 海にらとよふくは二町も
 中の子の音もさうさうあり
 三拾く鐘はまんとやと鐘六つ
 舞と喚とく紫もさうさう
 阿のまはとく入返者のあのみ相
 きくく名のまにまんとく

光 和 光 和 光 和 光 和 光 和

結梅を花の目おと下り舟
 とわらとくさんまはくれは
 陸の鹿もふまあより中をさ
 答のころんがさあはく 笑
 二石先もぞくもあぬは丘たさ
 南暖嫁ても踊るやうく
 ちらにのまも人まふ秋の風
 昔ふけはるし 調の月 露
 裕多く百社よんまはさうと氣

光 和 光 和 光 和 光 和 光 和 光 和

よみかゝるゝも貞喜のころ

光

仙臺のきこゆるけの真娘のちか

光

鏡のやけくさ旅の三途

知

けの雲も雨もせん雪も降るを

光

海京のまはるまやあいらを

光

かへきんももく歩居もみせ

光

あぬ子く習法意のまは

光

三條のりくを以目れむさく字

光

台をまはる乃桃の投入を

光

出雲乃浪澄はくくたりのを

光

之入りく第一 不柏子

如

十五夜 祥忌

名目や葉吹も海れをく川

光

まの山乃まをたのま堂なる

松茸の松葉ふる京の恋はく

あゆらまをるふサ登を

其は獨りをはくをな、その葉のちり

秋のたかまはく、まはくくはく

十六夜

此の程のまのくさくさの月のかげ

尾花

三十三の年をくさくさ

松

大梅

つらつらとくさくさ

酒のあつたハ田も畦もや

梅

あつたつとくさくさ

そ白いさくさ 菊の木の

梅

墨のくさくさ

とくさくさ

梅

山の色もくさくさ

梅

尾花のくさくさ

梅

木うしろのくさくさ

梅

花のくさくさ

梅

三つとくさくさ

梅

歩のくさくさ

梅

初冬のくさくさ

梅

子鶴のくさくさ

梅

とろけのくさくさ

梅

+

伴も静りしきる牛町

香

佐藤の心あつた言ふ本と極て

舟舟のやうな後遊の舟

梅

昨日の十五童子に申し万い

香

さへお終りして加賀の弟永

梅

きもきもやうな信のもしん扱忌

香

是りおまり 表れりりる

梅

等ふあう豊成のきく

鯨 鯨

梅

江波の間く あ い い い

梅

柳了やまきくよたユハうつ走取

香

あつたまきる 鶴 い い い い

梅

鶴のり 鶴 い い い い

香

雲より い い い い

香

後石 い い い い

梅

村 い い い い

梅

ほらくと穴のゆき い い い い

香

何 い い い い

香

梅 い い い い

梅

うのち地も長と都

香

清君若月を枯辛の白くとして
初雪のよむ多きなり

夕月やまきまのまきまの月 馬光

夕月やまきまのまきまの月 永年秋

夕月やまきまのまきまの月 寒和

夕月やまきまのまきまの月 移竹

夕月やまきまのまきまの月 大あ

夕月やまきまのまきまの月 故一

夕月やまきまのまきまの月 散木

夕月やまきまのまきまの月 花屋

曉月や月のこゝろの山は 甲馬 白芳

三月月や一二の傷れ 露新

ちるを掃きよきし月の 納子

明日や天のあへり 蓮石

夕月や大名通 竹郎

ゆき

夕月の雪をうのきす羽えり 故一

夕月の雪をうのきす羽えり 散木

夕月の雪をうのきす羽えり 松侯

くれ

新しき八月を車のくまの由る車
 こゝに又名も河の心の極ふ
 初雪や掃落して結木よの枝
 ろつ香や燃りともまねりあを
 輝けり流り燈出しく雪を分
 月を田の面乃水に燈を分
 分るる形は代りまを分けの月
 三十のやまにちり花あはしく
 ういそや海よりはる海の名

振 高 高
京 櫻 嵐
甲 明 方
 魚 色
 馬 鹿
 夏 明
後 宿 河
尾 鉄 叟
 星 杏

茶す糸一貫山の福やあはるま
 ろくひまに月星や園に都に
 山くくれ雪の旨はほやまき
 守ぬ百に歌きのあまう町を
 夕の目薬止ふも影に何を
 月をくくし朝の二のちをま
 本名ぬのや青ぬ月をくくま

素 相
 菊 友
 岩 代 居
 城 背
 如 右
 文 尺
 帯 白

うらやまのこゝろにぬれぬまゝにふらふらとゆるゆると金もなや入やと
可なりと雷申度の手言こぼりの流石にて梅は
人のさうと梅は入らばいりすはさくらと梅のあはれ
不討名とさるも唯とく上事かたも也つ中人申く
公事ぬぬつとく然せし時氷をば命もとめて云
ま別より次あて中は結ぶ小物ぬ向あはぬぬれぬぬ
有沙と高しとふとふと物物しはすたはる高我
極く又自然にぬれぬとくはつた任ふ高の波なれと申
はく雷雷の流石とくはつた雷と申りあはれぬ
身の許し事りのふらふらと事かたもつたのふらふらぬ

更り帝よりなるもなりのふらふらと梅の白波と
の流石とくはつた雷と申りあはれぬぬれぬぬ
かたの流石とくはつた雷と申りあはれぬぬれぬぬ
とれぬぬと梅と申りあはれぬぬれぬぬれぬぬ
清房は水のゆとやん結と梅と申りあはれぬぬれぬぬ
は時の葉子とくはつた雷と申りあはれぬぬれぬぬ
色相形容のふらふらと梅と申りあはれぬぬれぬぬ
公事とくはつた雷と申りあはれぬぬれぬぬれぬぬ
さうと梅のふらふらと梅と申りあはれぬぬれぬぬ
一はる事流石より申事の山中へ入る事この程梅と申りあはれぬ

形有御本寺ありし安形公多事ゆれ海を百里北旅及
かして地のかく傳へし一人の子乃は所がし心修學勤に
のりあしる京に定せ御堂のきき學堂しておるおし二
と弟もつてそ一ひきを修學しきふ所は所あれ回約の心本
寺宿せんと云男女老若と定給し幸とひの云々とせり
人お世とふらうらばして極と事とせしと修やを修し
長く先く世の事とありやとく修子の修學とておて
身つきのめとやとと修し一牛のやめやとと修しううと
修し心可化の衣は始め修女の物とく修しとく修し
修し心可化の衣は始め修女の物とく修しとく修し
修し心可化の衣は始め修女の物とく修しとく修し

法つ燈はびとて日とてはるあつて三日四日つてはる
連のつてはるあつて日とてはるあつて三日四日つてはる
斗と本ぬとや下り修しとく修しとく修しとく修し
かつ修しとく修しとく修しとく修しとく修しとく修し
せんも物とく修しとく修しとく修しとく修しとく修し
花の都とてはるあつて日とてはるあつて三日四日つてはる
十日の日を修しとく修しとく修しとく修しとく修し
修しとく修しとく修しとく修しとく修しとく修し
修しとく修しとく修しとく修しとく修しとく修し
修しとく修しとく修しとく修しとく修しとく修し
修しとく修しとく修しとく修しとく修しとく修し

のち花をうきしるまゝにやうふあき眼力も方海也
中やと遊方終るるに命あれやあのもういふや
の月々方中中々庵もいん物成りしに
外より一向の言尚ほなるといふと誰か
見減る所さきけりや一向のあつた
と併南すめは蓮華の縁乃ねえの
姉よりりりめめいふや

一サとや解るの以解し仔細の乙由を人
今より仰りおろあはれ活る俗
形もいふや

面のや句めけり
うらと藤面
てく一其
振る物
さし
万
三
る
う
やん

一 紫剛く彼俗めしきしとて初らひ備えりしは
こけし俗終俗一故のそ界らんらん人らるるをかりしん
とば高きあふたのまれば候もあ陸々の縁がしき系の大
至剛也あふたし

一 系之言水葉そし初ややもむ松の梅ら古のは敵とら
自れ拙初らのやもむもむ思ひて高きあふたの縁がしき
し一河の高きもむ思ひて高きあふたの縁がしき
つる言もむ思ひて高きあふたの縁がしき
もむ思ひて高きあふたの縁がしき
もむ思ひて高きあふたの縁がしき

一 延向氏借て道は深く入るあむの海く平く句子地は
右のたきを在とせし句地は遠しとて高きあふたの縁がしき
もむ思ひて高きあふたの縁がしき
もむ思ひて高きあふたの縁がしき
もむ思ひて高きあふたの縁がしき

一 婦山の文字は二つにもあるは是れふもあむしれは説苑卷
七政理篇曰文王問於呂望曰為天下若何對云王國富民
霸國富士云東都の御禁へ千秋を壽の南山とて富士の
りの按しきし鏡村井氏を理引出

一 京の所は中にもあむし大坂へ下りてあむし例の事耳とて

うぬくまの長法はあつたのしるしにさしあつたか
ものしるしにさしあつたか
物に入らずにさしあつたか
と仰るにさしあつたか
出さずしてさしあつたか
又由食と人使ふにさしあつたか
まづさしあつたか
才志の比にさしあつたか
自化さしあつたか
さうさしあつたか

この聖教もさうして今連続さるるは料理美味給接とや
いふ事やせんやせんや

一尚古の遊芳なるに口口観る。中の君。小鳥。白女。解懸島宮殿。
如意。香爐。林檎。河松。孤。宮。子。今信は
此の僧家や。船と格向してさきと。枕とさす。此の人々
さしあつたか。さしあつたか。さしあつたか。さしあつたか。
いふ中の事や。さしあつたか。さしあつたか。さしあつたか。
羅もさしあつたか。さしあつたか。さしあつたか。さしあつたか。
此の贈答の事もさしあつたか。さしあつたか。さしあつたか。

甲をいふまじしを恥し奉

まう物名志しる者名女信と

ふらふらおを清負とせんや

まゝ物負とせんや

しゝるぬ負也と負るるまゝ

りん許み之負とせす一瓢一

軒如古とあり有雨をたぐひ

をふせく海まゝ是身与あま

るゝ守確るあからちる乃

ふあゝあゝ草一筆

建之 子あり 山素堂

天和二年秋九月霖波願主之音

濺筆於敗荷之下

山素堂

一五反 柳真一三反 四郎次一拾五反 楓真

一四反 長吁一四反 勝延一四反 茂高

一三反 侍家一四反 以負一三反 小多集

一五反 七く物一三反 愚心一五反 孫子

一五反 巾子一五反 五多集 一三反 九多集

一四反 六多集 一三反 八多集 一五反 伊多集

一三反 石嵐 一三反 秋少 一三反 石斗

一三反 泉之 一三反 不卜 一三反 殊直

一五反 洗口 一五反 中樂 一三反 松風

一三反 扇招 一五反 半多 一銀多 文麟

一五反 翠白 一五反 三多集 一三反 及下 茂高

一五反 川村口 一三反 調音 一五反 暮角

おのれも終つらき様とてうり不見書白男成り
あつて温厚な如きの人なり一學は林春所先生の言
知彼と林明院殿乃御門人なり如彼の才なるや
いふおぼやきくむのいふ目の前なるぬき
一とていふことある世に言ふ言物盤秘録せし事子
へあまの遊藝の事味を昔の氏の代りては
おのれもいへるは又あま御しあふことなり
限あまのたし一閑あつたのたしに遊藝とては
あつてゆひのたしに遊藝とては
まはあまのたしに遊藝とては

のいふことある世に言ふ言物盤秘録せし事子
限あまのたし一閑あつたのたしに遊藝とては
あつてゆひのたしに遊藝とては
まはあまのたしに遊藝とては
いふおぼやきくむのいふ目の前なるぬき
一とていふことある世に言ふ言物盤秘録せし事子
へあまの遊藝の事味を昔の氏の代りては
おのれもいへるは又あま御しあふことなり
限あまのたし一閑あつたのたしに遊藝とては
あつてゆひのたしに遊藝とては
まはあまのたしに遊藝とては

遠望む一炬の細まらうにけいこまはるまじく飛ぶる子
無名を天地乃始とや彼夫毎何者かつらういふれり
くももきくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
さばりり知人も形くもさるもぬりけいこまはるまじく
乃まきまらうにまらうにまらうに

正當八月十五夜

黒露

月一氣の盡くお由のいぢの月
秋考乃香結神のむ
かましくいひくもれむく記て
かましくいひくもれむく記て
小波の小より早ふ小は煙
うたて 草の言伝風呂
かましくいひくもれむく記て

わしや流 隆尾の主人を
原えちやうんしんき名まら
きんあへんきとまゆり
下馬札のきつし神もたのき
んさうや椿いさく 像いさ
浄福院のき社のはく 傀儡師
さうら女房ハキキまらうら
神のきしんしん 石護尾のちも
傘よ百端しん 入るしん

二八

名

つくとまらしん 約右持
子縮り物 厚し 事初
柳らる けきさの 風を音
四十七橋の堀乃夕ら
きあうらまらしん 牛車
者ハけらまらしん 船
小官物屋ハそり掛ハ
き入れと者ハそり
かようしん 作舞も 柳の

大根氏後方の句を
 居七のせしむる今昔
 室亦年向の比喩を
 とくし大更浅るる
 都を能無りや
 病の依て小舟を
 け舟田の宿 二り
 往來の舟とまり合ふ
 八の長月の未く
 云くも不足つや

空舟のまはる家の白浪と
 舟人やうて笑ひい
 舟のふたふた秋と
 去れやぬとりの
 云くも不足つやと
 出

水のむ喜れりあいてる

ゆくれと若てとつちもほい

すめん淋しきは茶垣の外

海よりとむむ野々

きししくとあうつ

秋もや燈し

大根と浅るる

拂り状もつや相感も

澄橋の侍子

あはれてはうらやましく
 花のまささく

昔の谷中乃

素眉の侍後の才と富て
 桃橋く存く能相
 此の言とち
 桃青句と
 指て
 此まをこれと
 して
 小のゆて
 年ま
 海より
 経く

目よ見ゆる月のかつら
 十五夜と云ふもむや思ふに
 明日は先ぬはくや序の
 蝶くのたけも管糸五十年
 月よおのけりおむさひり那
 らいふの塔も五重や朝の月
 夕月や似る人もまよひり
 渡久

子句集三十三回のちよほて付と
 あけ〜あみ〜中秋 五十年
 久住

五十嬉りさあやるも 月れ空 菊町
 也
 後ろ〜引つる杖や花の命よ 園如
 るる月や碑もほろ〜とひ〜 糠丸
 三月月のひび〜き〜 岩の〜人 渭園
 お葉もり志も〜き〜 藤の〜は〜 瓢女
 婦〜の〜の後ろ姿は〜の月 麦秀
 目よおのけりや月の園あそび〜り 馬式
 おれて啼き〜の句や月のかさ 夏輔

晴寛へ改姓一守り寝の目 百也

自傳くやも海も海もや 江胆

かろくや晴名もけり月か秋 菊年

取るくも秋も極のむ乃下 龍吉

多日や雪くも雨後の舟の伝 葦岸 守石

かきむらくもも愛うむ十道 上石田 宿戸

居よの如き帯もけり月の 盛年 守

ほくも月高土に旅望もけり月 五橋

ほくも月高土に旅望もけり月

月やけりもよめぬもあま 千極

淨き名や月か秋て五ヶ秋 上石田 守芳

日向きも

果の向も思ひぬさく那の山 東山原 石牙

石おねくかきくはほろもきた 石森 百鬼

向果の産の鳴き一冬の出 百鬼

多日や雪くも雨後の舟の伝

取るくも秋も極のむ乃下

多日や雪くも雨後の舟の伝

下石田 宿戸 守石 守

郭と沼の岸一す星月夜
 魚色
 七月の園れ標やわきま
 白
 梅のほやまや香々時
 白
 鳴るや入港ふし月や社
 久住
 鶯のけりまといくはるる
 久住
 けりまといくはるる
 泉布
 泉布

日

新橋くやち栞紙の片月
 糖丸
 夕月やあまふきの楮柳
 久住

夕月やあまふきの楮柳
 魚
 夕月やあまふきの楮柳
 里
 夕月やあまふきの楮柳
 荷
 夕月やあまふきの楮柳
 馬
 夕月やあまふきの楮柳
 打
 夕月やあまふきの楮柳
 打

雪

雪の海もや町へふるまきれ
 雪
 一分の塵價も雪へおまき
 久住

初雪やまじし獄もみる白根 泉市
 ひらり又二人を霞のき 寺芳
 卯の志も月を降りしやぶ女 夏露
 春のやぶをふらふ折し木くの香 ぬらん
 くらげや名目もくはるの偶 自来
 時ふらふ卯の言葉川よの香 魚奴

萬代巻中ぬ

さうらうの園子煮て長く 竹芬坊
 古城や夕日と花のしらゆ 櫛 くら布

むさうらうの山も煮ぬ山ゆ外 笛戸
 茶椀の花の心等乃を庭而 久住
 茶の中へらりてを寒く櫛哉 玉露
 鐘とみ紙佛のつかりぬらん 振丸
 雄子かきやむくもねるほより 歩は
 るせめる小怪り櫛とらるらん 茶町

春に入りの極みはるる入る春の
 板石より薫山の香もさうらうの
 ころも春の香くはるる春の交りとも
 晴る春の香くはるる

葦のやどり一羽の板百と書

素堂

しらべく、葉の代よ秋風

岡牛

高しん枝まう、昔柄をまひる

久任

よむもふらむも海のせれ中

椽丸

五下方船れく、目おろし

桑町

きく響のねる、響の夜

馬鹿

結中へ切欠らう、まろい豆版

角下

髪代いらうてん、四つこ

恋も形く、紗布へ文とさしひこ

町住

まきい、可中らう、あなを遊幸お

丸

るる、ねく、音呼あ、む五月ねん

字

凡進、もく、あ、陸皮、島島

町

江戸、江戸、難波、り、あ、ま、櫓、柱

住

薩、廣の、響、袋、箱、沙、え、そ、お、ろ

牛

師、を、く、ま、は、く、月、の、ま、ま、あ、ま

高

あ、りの、ま、ろ、く、ま、と、り、ま

町

さ、ろ、は、ま、く、ま、ま、あ、ま、あ、ま、ま、ま

丸

あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

住

酸の物ハあんふふぐいのち也

すゞと巻うきふ連ひき

栗の山香ハ蒸のゆりともそ

今度のお織をそそも産

松の糸うつつの縄やうりうを

たうぬぐたまやうそ并き門

雑焼々事掛とのぬき一

おまの伝きよの甲く

利刀のえハ乃ノ字々研了玉

丸 産 牛 戸 住 丸 産 牛 町

そくくハやういでもの 伝

蓄養及小自修居由焼も控れも

一より残のちぬ所つ

ちよら^ウか^ウる夕紅の火焼る

山焼ふ成きうか 古楠

ちぢく^ウゆ^ウくわ^ウるま^ウと^ウかり^ウあり

勝^ウも^ウく^ウく^ウ果^ウり^ウん^ウじ

石^ウや^ウの^ウむ^ウも^ウ自^ウて^ウ五^ウ十月

ろ^ウく^ウぬ^ウ處^ウの^ウ初^ウれ^ウき^ウ風

戸 丸 住 牛 町 音 牛 住 町

風流の身髓去り跡傍の云々を之とて其名不刊本載事最既今歳
 酉八月十五日酉當五十四回也里露老人頻ニ應テ追福之白ニ求ニ少カ普ニ意
 趣ヲ迷ル鼻ノ懷ル耳

是やこ乃葉危り河武秋の月 百菴

十と我の月やいりのとと十自 ぶうい

はるの昔祖吾父兄のよむ心婦とて

少月やたきりきりきりきりきり 周齋

良お

出のやいぬさかかてまふ月 松庸

多自や太菊のむらぬいげも 神魚

後抄しをいささるるの月 夏若

十六招やが川倉り山ほりき 泉川

文りや名月高き海の向 窓雪

二千里の外

月々中他何上人きいつくや 買明

多日やきりのおき林の月さく 文尺

当りあつた物のきりよりの外 六窓

少日やまほららけまのふり 茶湯

同坐

姫もすゝめはじやうの月れき 梅川

夕月や浦のつらさも重なるか、
 宵形そくくは海や松の月
 明日やまきあしつゆのあ
 夕月や肩とくくは豆の解
 きのくきおる也七是月
 夕月やまきあしつゆのあ
 夕月や花をくくは松の月
 夕月や花をくくは松の月

松籠

おぼやこはまきあしつゆのあ

楊川

都く節言つきぬく流の中
 砂をくく目もくくはみ銀
 松字りきくくくくくくく
 あくくくくくくくくくく
 時くく初言もあの一糸
 妻おの縁はくくくくく
 鴨のくくくくくくくく
 初言もあしつゆのあ

ゆき

陸山

待魚

沖魚

周舟

革膏

松庸

夏着

岡樹

舟の音松もねうよ川情も申
意者
三遊

六塵の鏡より迷ふ

印書く一寸くらひ厚き紙
冥如

くろ雪や傘の人より星の人
寒威

對少くも加へくん雪まらけ
文尺

花

ちよふふとふふ花をえん花の位
六宮

推く敷く流けくそまき茶の門
里告

かつく兒のまほし

おるけれ橋のゆりや花巻
尾沼

権舟の依山崎さやむさうり
妻由

五更の橋中花とよ川に平余の
向くはけり花さるぬまきりさ井のい出

むさうりはむさうり葉のいり
文尺

花と燈籠くくく野のまきり
五燕

まさくくまの待橋へりくま
紙茶

牛の音やま木候さくま
非魚

あし人さくくの遠ハ後ゆり
馬鹿

ちよ橋アさくはあさくく
素丸

明和ニし酉年八月

明和乃佳晴きとて秋角のりらすと
有るを以て其秋も去るへりすと此
少くも元和元手申秋南呂乃月あれ一
か冊をゆゑる

彫工江戸

石井八右衛門

四十一葉終



